

集団疎開の思い出

S21 年卒・三保幸吉

小学五年の夏、戦局は益々厳しくなり、学童は本土空襲に備え、集団疎開をすることになった。親元を離れ甘える相手も居らず、十分な食べ物も無く、虱に悩まされ、不自由な生活であったが、必ず勝つ日が来ることを信じさせられ、我慢の日々であった。実質一年二ヶ月の疎開生活であったが、今でも三年位の長さ感に感ぜられる中味の濃い体験であった。

東京はじめ地方の大都市かもこのような大量の学童集団疎開は、世界でも例をみないのではないのでしょうか。

(一) 豊田学寮

八月の暑い日であった。豊田駅で降り都会から遙か離れた田園の風景や匂いを、どう感じたのか、全く覚えていないが、道沿いに用水路があり、豊かな流れに身を任せた水草がゆらゆらゆれで、黒い羽根のトンボが水面すれすれに、戯れていた光景は、はっきりと今でも目に浮かぶ。

最初の生活の場となったのは分教場で、その広間の壁側に衣類や少しの勉強道具を行李などに入れ積み並べ、南側の窓からは小グラウンドが眺められた。トイレは建物と続いているが、少し離れた所にあり、すぐ裏はお墓で不気味であった。

集団生活も一週間ぐらいして落ち着いてくると淋しさが増してくる。然し何と言っても食べ盛りの時期、食事の量が少なく満足しなかった。友達と、あそこの天井はうまかった、あの店のアンパンをもう一度食べたいなど、なんの足しにもならない話をして紛らしていた。

或る時期から、かなり離れた日野の小学校の一教室をかりて勉強が始まった。田舎道を列をくんで、よく歩いたものだ。地元の生徒との多少のいざごは有ったろうが覚えていない。でも肩身の狭い思いで、休み時間もグラウンドで遊んだことは無かった。

学校とは違い二十四時間団体生活をしている世界、喧嘩やいじめはあったかもしれないが、あそびの範囲、またサル社会のようなボスが出来てみなが従うような事も無かった。良い悪いは別として、そのような、カリスマ性をもった人が居なかったからかもしれない。

(二) 龍光寺

先輩が卒業した二十年三月、八王子郊外のお寺に移った。近くにきれいな小川があり、魚が泳いでいた。今までとは違い、お米・野菜をリヤカーで運んだり麦踏など農家の手伝いもした。お風呂は近くの農家にもらいに行き、その時必ずさつまいもなど心づくしの食べ物を頂けるのが最高の楽しみであった。

やがて地方都市の空爆も始まり、ついに八月二日、焼夷弾でこのお寺が焼けてしまった。空襲警報で防空壕に入っていたが、先生の指示で皆で山の方に逃げた。赤っぽい夜空に黒煙がもくもくと上がって恐ろしい思いであった。夜が明けてぼう然としながら、黒焦げたじやがいもをたべていた。このお寺が焼けるなんぞ思ってもいなく、全く着のみ着のみであった。

(三) 終戦

終戦は豊田に戻った時であった。日本が負けたことを先生から聞いて、口惜しさより先ず思ったことは、今夜からぐっすり眠れることが何より嬉しかった。その日の午後、寮母さんや仲間二十人ぐらいで近くの川に行き、もう空襲のない大空を眺めてのんびりと泳いだ。

戦争が終わっても焦土と化した東京には直ぐ戻らず、暫くは平山の鮫陵源で過ごした。そして一貫目のサツマイモをお土産に大井町に帰ったのは、秋も半ばであった。